

対談：ESDによる地域創生

比田勝尚喜 × 阿部 治

阿部 比田勝市長と私とで、対馬市のこれまでの取り組み、そしてこれからの連携の方向性などについてお話ししたいと思っております。対馬市の取り組み等の中では、つなぎ役（コーディネーター）が大事なんですね。「ESD」という言葉が出てきたことによって、持続可能性に関わるいろいろな人、あるいは組織がつながるようになりましたが、そういう意味で、先ほど市長が対馬を「学びのエコアイランド」とすると言われましたが、対馬市内の人たち、島内の人たち、それから島外の人たちをつなぐ存在が非常に大事で、そうした役割を、市の職員である前田剛さんが担ってこられました。前田さんのサポートなくして、このたびの連携は成立しませんでしたし、今後も展開しえないと思っています。

また、本日の会場には、対馬市に何度も行っておられる方がいらっしゃいます。そうした方々にも、今どんなふうに対馬を見ているか伺ってみたいと思います。あと会場からも質問を受けたいのですが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。

質問① この4月から立教大学の史学科にまいりました木村直也と申します。専門のフィールドが対馬なものですから、30年以上、毎年のように通い詰めています。1年半ほど前に『岩波講座 日本歴史』第20巻「地域論」（岩波書店 2014）の中で「対馬」という項目を担当しまして、近世から近代にかけての展開について、二つの視点から書いたんですね。対馬は国や民族を超えた境界領域としての可能性を持っている地である一方で、国家からすると周縁になるため、場合によっては、中央から見たときに辺境に位置づけられてしまう。こういう二つの性格の中で、いつの時代も動いているわけです。近代に入って国家の力は強くなりますが、境界としての対馬のもつ意味は、別の形で現在まで残っていく。先ほどの市長のお話は、30年も通っているのに私が知らないことがたくさんあり、非常にありがたく拝聴しました。

郷土への取り組みというのは生き生きしていて、わくわくしますが、私が申し上げた「境界領域」としての意味——現在的に言えば韓国との関係ですね。さまざまな影響や問題を孕んでいるものの、観光客の力など、韓国との関係で経済的にも維持できているところがあると思います。その一方で、中央から見たときの「辺境」という視点になりますが、離島振興法などによる予算等で、数十年間にわたって空港ができたり、道路がよくなったりという状況があるわけです。そういう二つの性格と、今日のお話はどうつながるのか。あるいは、今回のようなプロジェクトを進めるにあたって、両方のことをどう生かしていけるのかを伺いたいと思います。

阿部 ありがとうございます。重要な視点ですね。もう一方、いらっしゃいますか。

質問② 民間企業にいらるのですが、地方創生関係で全国各地から相談を受けていて、民間

企業でできる NPO 法人的な動きをしています。若者が国をつくることは間違いないですし、阿部先生がおっしゃられた「人づくり」における ESD の考え方は非常に共感するんです。着実に一步一步、一人か二人でもいいから、そういうふうに育ててもらいたいという熱い思いを感じます。しかし、どうしてこんなに東京一極集中になり、若者が東京に集まってしまうのかを考えると、大学があるから集まっている部分もありますね。昔は、地元の国立大学に行くことが一番よくて、地元で働くという状況がありましたが、時代の流れが、いつの間にか若者を東京や大都市に集中させてしまった。そういう点について、学生をずっと見続けている大学としての立場からどう思われているのかを聞いてみたいと思います。

阿部 ありがとうございます。お二方の質問は、この後の話を展開する中でふれたいと思います。

■なぜ外から対馬に人が来るのか

阿部 先ほどの市長のお話の中で、大都市圏の学生が島で学ぶ意義、学びのエコアイランドとしての対馬、子どもが島の宝であるということが挙げられていました。当然対馬には人が暮らしていますから、経済の活性化も不可欠です。その上で、対馬で ESD による地域創生を実践することの意味を考えると、この三点が重要なポイントになります。二番目のご質問にもありましたが、本当に、学生の東京一極集中がすさまじいですね。立教大学も 8 割ほどが首都圏出身の学生です。そういう中で、立教大学としても地方の学生に来てほしいと思いつつ、首都圏中心になってしまう。そうすると、首都圏の学生は地方のことをほとんど知らないんです。だから、授業で学生に話をしても、過疎化の実感がわからない。少子高齢化と言われてもぴんとこないし、過疎地域、離島の現状を知らない。そういう人たちに対して、たとえば、対馬を舞台にさまざまな課題を知ってほしい、学んでほしいという気持ちがあります。日本社会、地域、離島は、そのまま世界につながっているんですね。それがグローバル人材ということになると思うんです。対馬では、I ターンで来られた川口幹子さんがいらっしゃる。川口さんは青森のご出身ですが、地域おこし協力隊の隊員として対馬を選んだのは、なぜでしょうか。他にも、対馬には外部から多くの方が集まってきていると思いますが、そのあたりのことを伺いたいと思います。

比田勝 川口さんは、島おこし協働隊として赴任されて、とくに限界集落に好んで入っておられます。その中で、消滅しようとする村を救うため、再度活性化するために、耕作放棄地を整備し、また古民家を再生するという活動を進めてこられました。彼女の考え方に共感して、都市部の若い方々が対馬というフィールドを選んでこられたと私自身は感じております。その担当をしておりました前田から、少し補足してもらいましょう。

前田 対馬市役所で、地域と大学の連携、学生の受け入れや地域おこし協力隊制度の企画担当をしておりました前田剛と申します。2002 年に立教大学を卒業しまして、今回このように研究連携の覚書が締結できましたことを非常に嬉しく思っております。

なぜ対馬なのか。我々が地域おこし協力隊を募集したとき、応募があるのか非常に不安だったんですが、選考するのが大変だったくらい、たくさんの応募がありました。た

だその中で、対馬に来たことがある人は、ほとんどいませんでした。対馬が好きだとか、対馬の資源がすごいということではなくて、地域がどれだけの思いや志を持っているか、それに共感して人が集まってきたように思います。先ほど当市長が話しましたように、川口さんの志や思いに共感して来る。また、いろいろな方が対馬に来てくれる、応援してくれる。数多くの学生、立教の後輩たちも対馬に来てくれていますが、そういった志や思いが届いているからこそ。そうした「場」の中での志を、どのように高め、広げていくかが重要だということは、外部人材の募集をする際にいつも感じています。

阿部 ありがとうございます。私も若い人たちと出会う機会は結構あるんです。それで、首都圏に住んでいる学生に話を聞くと、彼らの多くは「自分の田舎はない」と言うんですね。自分が生まれ育った地域に、全然愛着がない。小学校は自分の家の近くに行ったけれど、中学、高校はちょっと離れたところに行ったとか、父親もふだんはほとんどいない、とか……。そこは生活の場じゃないと言っていました。その学生たちが、たまたまある地方に行ったところ——彼らにしてみたらどこでもよかったかもしれないんですが——その地域の人たちと出会ったことで、意識が180度変わったと言うんです。自分のことを気にかけてくれる、だからつい行きたくなる。そこが自分のふるさとだと言う学生が何人もいたんですね。そういう学生が増えている。先ほど前田さんが「志」とおっしゃいましたが、対馬の人たちが、外部の人たちと正面から向き合って話してくれる、関わってくれる、本気になってくれる。そんなところを「志」として受けとめるのかもしれないですね。

比田勝 私もそういうことだろうと思っています。例を挙げますと、川口幹子さんの他にもいろいろな隊員がおりまして、その中に獣医師免許を持っている女性がいます。都市部で開業すれば楽な生活ができたんじゃないかと思って、最初は話をしていました。でも、実は彼女は学生時代から何度も対馬に足を運んでいて、対馬の有害鳥獣の被害に興味を持って、自分が解決の一翼を担いたいという思いから、獣害を「獣財」——財産にするために一生懸命、活動しています。この3月で島おこし協働隊を卒業しましたが、以後は対馬に移り住んで、今度は自分自身でイノシシや鹿の肉を活用したハムやソーセージ、精肉を衛生的なガイドラインに沿って販売していくことに取り組んでいます。彼女たちのように、それぞれの目的に沿って対馬にやりがいを見つけているんだろうと思っています。

阿部 環境省の自然保護官で、最初の赴任地が対馬だった方が、そのまま環境省を辞めて、去年対馬市の職員になられましたね。川口さんが最初の突破口だったかもしれませんが、類は友を呼ぶということがある。それと同時に、対馬の人が魅力的だから残るんでしょうね。だって、関係性が悪かったら残りたくないですよ。そう考えると、たとえば、川口さんたちがいる志多留地区は特別な地区なのでしょう。外からの人たちに対して開放的というか、非常によく面倒を見てくれる。対馬全体が、先ほど木村先生がおっしゃった辺境、境界であり、大陸から朝鮮使節団のような人たちが入ってくる。そこでいろいろな人たちが交流し、行き来する中で、さまざまな人を受け入れる素地が育ってきた。それが「つしまヂカラ」の源なのでしょう。

比田勝 川口幹子さんが住んでいる志多留地区は、高齢化率こそ高いものの、そこだけが特別に開放されているとか、閉塞性があるとか、そういうことではないと思っています。

川口さん自身、限界集落を好んで、今まで農地造成等が行なわれていない地区を選んだわけです。そこで自分が耕作放棄地対策もやっていきたいと言っておりましたので、決して楽をしようということではなく、難しい地区に入って自分の力を試したいということではないかと思います。

阿部 Iターンなどの形で若者が入る場合、日本国内をみても、地域によって対応がだいぶ違います。外部から来る者を受け入れがたい地域もあるし、逆に受け入れる場所がある。それは対馬の中でも違いがあるのかもしれませんが。地域の方々がどのように彼らを受けとめていったのか。そのあたりのことも伺えますか。前田さん、いかがでしょうか。

前田 私も12年前、立教の学生時代から対馬に通いはじめて、移り住みました。そうした「よそ者」の立場から申しますと、皆さん、島というと閉鎖的で、よそ者に対して排他的というイメージがあると思うんです。私は最初、ツシマヤマネコの保護の取材で行ったんですが、対馬に惚れ込んだ、引き込まれた理由は、やっぱり人の魅力ですね。なぜ対馬の人がよそ者に対して優しいのかというと、先生がおっしゃるように、島は時として、開放的に交流することによって島にないものを得てきたし、食料生産できない場合は、人口を増やすことができないので閉鎖的だったわけです。それらをうまく組み合わせていたのが、島の生き方だったんだろうと、私は思っています。ただ、対馬の方は、外から来る若い人に対してとても温かく、優しい。今日は、対馬に何度も通っている学生が来てくれていますので、対馬の人のよさなどについてコメントをいただきたいのですが。

笹川 立教大学大学院社会学研究科博士後期課程に在学し、阿部先生のもとでESDにおける地域づくりを研究しております、笹川貴吏子と申します。私自身、地域おこし協力隊という制度で茨城県の農村で活動していました。2013年、協力隊の任期3年目のときに、学びの力を地域に還元するということに興味を持って対馬へ行き、そこで阿部先生にも出会いました。それがきっかけになって、社会人入試で大学院に入り直しました。対馬に行って、地域の人に教えてもらったことは「知る」ということの意味です。自分がなぜその地域にいたいのか。地域の「活性化」をめざして地域を変えていかねばならないと思う人たちが多くいる中で、むしろ変えてもらったのは私のほうだった、変わらなければいけないのは私だったということを地域の人から教えていただいたと思っています。

小板橋 立教大学観光学部交流文化学科4年の小板橋と申します。私は3年次の夏休みに1か月間、志多留集落でお世話になりました。島おこし実践塾と一般社団法人MITで、川口幹子さんから観光について学ばせていただきました。対馬の魅力は、やはり人です。私も「どうして対馬を選んだの？」と聞かれたとき、具体的に自然や歴史があつて……という答えは思い浮かびません。それでは、なぜまた訪れたいのかといえば、地域の方や幹子さんにもう一度会いたいから、という思いが強いです。

小沢 立教大学観光学部4年の小沢と申します。私も小板橋さんと同じく3年次の夏休みに2週間ほど対馬でインターンシップをさせていただきました。私は「こども寺子屋」という教育の実習と島おこし実践塾に参加しました。私は埼玉県出身ですが、自分が住む地域に対する愛着がありませんでした。日本のいろいろな地域のことも知らなかったもので、対馬についても名前を聞いたことがある程度でしたが、実際に行ってみたところ、

人と人とのつながりが濃密で、2週間ただけでもっと長くいたいと思いましたし、自分のふるさとの一つになったとっております。

比田勝 いま学生さんたちの話を聞きながら、島おこし協働隊の方たちが常日頃から話していることを思い出しました。対馬では「おすそわけ文化」というんですが、魚を獲ったら、近くの人たちに魚を配る。野菜を穫ったら「野菜食べんね」と地域の人たちに配る。島おこし協働隊の方たちも、各地域に入ったら買い物はしなくていい、おかずはあっちこっちからもらえるんですよ、と。そうした人情的な部分でも、喜んでもらえたのかなとっております。

■対馬にあるさまざまな「宝」

阿部 対馬に長く通ってらっしゃる方にもお話を伺いたいと思います。宮嶋さん、いかがでしょうか。

宮嶋 写真家の宮嶋康彦です。僕も30数年前ぐらいから対馬に通っております。先ほどお話くださった若い人たちと同じような年格好の頃は渡来仏に魅せられました。渡来仏が100体以上あって、朝鮮半島の三国時代のものがほとんどですが、中には非常に珍しいガンダーラ仏もある。民家の庭先に安置されていたものが出てきたり、そういうニュースを聞くと、すぐに飛んでいってました。約100体は撮影をしたはずですが、そのように表現の対象として芸術的な資源が非常に豊かな島だと思っております。

昨年出した『アジアモンスーン』という写真集の表紙になっている如来立像は、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、先に韓国の窃盗団に盗まれたもので、指が欠損したという不幸がありました。帰ってきました。また、対馬の小さなお寺さんに木造の女神像が保存されているんですね。これは仏像ではありません。虫食いで崩壊寸前なのですが、ある少女を一木彫りで彫ったものです。これが誰なのか、韓国に行って調査しているんですが、なかなかわからない。この像がいつの時代に対馬にやってきたかもわかりません。

そうした神秘があつた島にはあって、先ほど木村先生も「周縁」という言葉を使われましたが、非常に無国籍な印象も受ける島です。つまり、私のような表現活動をしている人間にとっては、常に神秘と表現の奥深さを感じさせられ、それを伝える、というところがおもしろいですが、勝手ながら私自身も表現していきたいとっております。

阿部 木村先生からも、改めてお話を伺えますか。

木村 私の専門である幕末あたりの時代は、内部での殺し合いがすさまじかったという歴史も持っています。私が最初に対馬に行ったのは35年くらい前、大学院に入った頃だと思っておりますけれども、まだYS-11が飛んでいました。県立の対馬歴史民俗資料館ができたばかりで、元画家の津江篤朗先生が資料館の嘱託でいらして、資料を見せてくださいました。大らかで、誰でも受け入れるような方でした。若造の私に本当に親切にしてくださって、非常に強い魅力を感じました。そのときにレンタカーを借りて各所を回りはじめたのですが、椎根地区で、おじいさんが牛を操ってリヤカーみたいな車を牽かせていたんですね。珍しいので、写真を撮らせていただいたんです。そうしたら、おじいさんが「うちへ来んかね」とおっしゃってくださいました。帰りの飛行機の時間が迫っていた

ので伺えなかったんですけれども、それを今でも悔やんでいて、一生覚えているだろうと思います。そうしたことが、30年以上もはまってしまった原因かもしれません。

阿部 他にも、武蔵高校の小池保則先生がお越しくださっています。武蔵高校では、高校生を連れて対馬に通うという授業を展開されていますが、なぜ続けているのか、お話しいただきたいと思います。

小池 武蔵高校の小池と申します。私も20年くらい前から対馬に通っておりまして、高校生を連れて行くようになってから、今年で13年目を迎えます。今年は、近くの早稲田大学高等学院の生徒も一緒に行く予定です。年々仲間や対馬のファンが増えてきているのを実感しています。私たちがなぜ対馬に生徒を連れていくか。私自身が考える理由のひとつは、対馬は勉強する材料の宝庫なんですね。単位になる授業として1年間、生徒は対馬に関するテーマを設定して、自分で研究するわけです。

阿部 いろいろな対象地域があって、その中から対馬を選ぶのでしょうか。

小池 いえ、対馬限定です。対馬の中の蜂洞であったり、ヤマネコ保護であったり、高麗尺であったり、いろいろなテーマを勉強しますが、そういった学習材の宝庫であることが最大の理由です。対馬に行けば何でも勉強になる。何か一つテーマを見つけると、1年間かけても学びきれないほど、歴史や文化が深い場所だと思います。

もうひとつは、これも私の勝手な意見ですが、首都圏の、とくに大学進学をめざす高校生たちは——大学生もそうかもしれませんけれど——足もとが危うい。つまり、東京中心でしか、ものを考えていないことに私は違和感をもっておりまして、この子たちはこのまま大人になっていいのか、もう一度日本という国を別の視点から眺めてみるべきではないか、と。自分の立っている位置を考えるとという意味で、対馬という場所が、地理的にも文化的にも歴史的にも有用な地域だと思っています。ですが、12年間かけてもまだまだ捉えきれないテーマがたくさんあって、毎年新しいテーマが発見される。対馬は見えない宝の宝庫ですね。

■ESDによる地域創生の可能性

阿部 今、みなさんに対馬の魅力を語っていただきましたが、外の人が対馬に入ってくること、さらに住みつくことは、これからの対馬を考える上で非常に重要なポイントですね。それに比べて、今後私どもと対馬市が連携して地域創生を進めていくときには、対馬で生まれ育った子どもたちが対馬に誇りを持ち、一度は島外に出てもまた戻ってきたくなる、そういう子どもたちが育っていかないと未来はないだろうと思うんです。Iターンの若者たちとの関わりがある中で、彼らと対馬の子どもたちが、補習や学習指導といったことで出会う場面がある。これは非常に感覚的な話かもしれませんが、そうした経験を通して、子どもたちが変化しているような兆しはありますか。

前田 今の日本の教育システムは、小学校、中学校、高校と進むにつれ、部活や受験勉強などが忙しく、自分の郷土について知る機会がないシステムになっています。知らないまま、ふるさとを離れて大学に行く。先ほど市長から話がありましたが、現在、国内外60の大学から650名の学生が対馬で学ぶ中で、少なからず対馬に生まれ育った現役の学生がその輪に加わって、他の土地出身の学生と一緒に学んでいるんですね。その学び合

いの中で、いかに自分たちのふるさとが恵まれているのかを共有しています。そういった対馬での「場の教育」を通して、対馬にUターンしたい、そのために自分の持つべきスキルを大学で吸収して帰ってきたい、という対馬の子たちが増えているのは確かです。対馬出身の早稲田大学の学生が、対馬での学びを通して「自分が好きだと思える場所を守りたい、大切にしたい、という思いが、自分にとっての地域づくりの意味だと気づいた」と言っていました。大学を卒業して、そのまま島外で就職して戻らないケースは多いですが、外の学生だけではなく、対馬出身の学生に対して、対馬のことを学ぶ機会や経験をどれだけつくっていきけるかが、非常に大切だと思っています。

阿部 昨年からはじまった「対馬学フォーラム」は、その意味で大きな動きですね。対馬のさまざまな資源を、島内の方々、あるいは外の人たちが掘り起こしていく。昨年の発表会は大盛況で、島内の人たちも島外の人たちも、対馬に関するさまざまな発表をしていました。とくに島内からは高校生が何件も発表していましたが、参加者から質問攻めにあうんですね。そうした経験を通して、対馬で生まれ育ったことへの思いが実感できる。また対馬全体を複数の大学のサテライトキャンパスに見立てた「フィールドキャンパス対馬学舎」によって、島外の若者が島内の若者と出会う。そういう場面はこれからも増えていくでしょうし、そういう中でUターンする若者も出てくる気がしています。

私が思うに、これまで日本の高等教育機関は地域に光を当ててこなかったのではないのでしょうか。歴史、文化といった遺産的、学問的なものとしては、光を当ててきたかもしれない。しかし、現在と未来に対して光を当ててこなかったんじゃないか。当然地域は単純ではない、重層的な構造を持っています。文化もいろいろある。しかし、そういう魅力がまったく伝わらない。平坦な、書いてある知識としてしか伝えてこなかったんじゃないかと思うんです。ESDによる地域創生といったときに、アクティブラーニング的な参加体験型の関わり、あるいは地域のさまざまな資源を地域の人と協働して学ぶといった活動が鍵になるでしょう。そういった関わりの中で、お互いに元気づけられ、元気づけるような関係が生まれてくる。おそらくそれがESDによる地域創生の真骨頂だろうという気がしています。

比田勝 いま阿部先生のお話にもありましたように、これまで対馬市には、自然や歴史や文化を含めて多くの大学の先生やら研究者の方がいらっしゃって、さまざまな論文等を書かれていることは、私も承知しております。ただ、それらが今まで地域の活性化にうまくつながっていかなかった。その点が、これからの宿題ではないかと考えています。そういう意味で、阿部先生が提言されたESDは、市民と、各大学の先生や研究者といった方たちが一体となって、活性化に向かっていけるきっかけになるのではないのでしょうか。また、そのための「人財」づくりでもあると思いますので、今後立教大学の皆さんとも連携や交流を深めて、対馬の活性化に向けて一生懸命、取り組んでいきたいと思えます。

阿部 ありがとうございます。今の市長のお話は、日本の他の地域にも当てはまることですね。かつて熊本県の水俣市に多くの研究者、学生が、国内だけでなく世界中からも来ました。そして論文がたくさん書かれた。しかし、水俣はどんどん落ち込んでいく。どうしてだ、もう外の人には頼れないということで始まったのが、水俣市の吉本哲郎さんという方の「地元学」なんです。これは地域創生の手法として、注目を浴びています。

でも「地元」だけではダメなんです。地元学は「風の人」（外部の人）と「土の人」（内部の人）が会うことによって、地域の魅力が生かされる、発見される手法です。今まさに対馬は「風の人」と「土の人」が一緒になって、地域の魅力を再発見しています。おそらくこれから対馬に関する論文もたくさん書かれるかもしれませんが、対馬が元気になる形で出てくるんじゃないかと思っています。

今日はありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。

（ひたかつ・なおき 対馬市市長／あべ・おさむ 立教大学教授、同 ESD 研究所所長）